

風流に見る「異国」

谷部真吾

1 はじめに

本稿では、日本のいくつかの祭礼の中に、「異国」からの影響をうかがわせる要素が見られることを指摘した上で、祭礼とは本来どのような特徴をもつ文化現象であるのか、考察していく。日本には、四季を通じて、さまざまな祭りがある。こうした祭りは、基本的に農作物の豊穰や子孫繁栄を神に祈る、宗教的な行為である。しかし、祭りの意義はそれだけに尽きない。とりわけ人やモノ、さらには金が集まる都市では、祭りを楽しむ、より具体的には見て楽しむ、あるいは見せて楽しむという志向が早い時期から生まれ、祭りがより華美になっていった。日本の民俗学を体系化した柳田國男は、このように華やかになった祭りのことを祭礼と呼んだ（柳田 1990 : 242-243, 247）。祭礼とは見物人が存在し、風流のある祭りのことをいう。見物人が存在するという事は、彼らと祭りの担い手との間に、「見る－見せる」という関係があることを意味している。また、風流とは新しい意匠のことであり、祭りをより華やかにするために付加・改変される要素のことをいう。こうした風流は、見物人に見せるために、さらにいえば彼らからの喝采を浴びるために導入されるとされている。以上の点からすると、祭礼とは本質的に、「伝統」と格式を重んじる不変の文化現象などではなく、そのときどきにに応じて新奇な要素を取り込んでいく、柔軟な構造をもつといえる。もっとも、このような祭礼も、時間の経過とともに徐々に構成要素が固定化されていき、「伝統」行事として認識されることもある。しかし、本稿で取り上げる祭礼の場合、少なくとも近世期までは、目新しい要素を摂取することに抵抗がなかったようである。しかも、それらの祭礼に新奇なものとして取り入れられた要素には、「異国」からの影響を想起させるものも含まれていた。

2 長崎くんちの場合

長崎県長崎市で毎年 10 月に行われる長崎くんちは、そうした祭礼の 1 つである。この祭りでは、龍踊じゅうおどりと呼ばれる出し物が見られる（写真 1）。現在、龍踊は、籠町、諏訪町、筑後町、五嶋町の 4 町内から出されるが¹⁾、もともとは本籠町（籠町の前身）という町内から出されていた（大田 2013 : 97）。龍踊が初めて出された時期は詳らかでないが、享保年間（1716～1736 年）とも寛政年間（1789～1801 年）ともいわれている²⁾。本籠町は、長崎にいた中国人たちの居住地区であった唐人屋敷に隣接していたこともあり（同）、唐人から龍踊を習い³⁾、唐人屋敷を通して中国より唐楽器や衣装などを取り寄せたという（王維 2000 : 94）。また、長崎くんちには、オランダからの影響も見られたようである。大田由紀によると、踊町の 1 つである江戸町は、1846 年（弘化 3）の祭りの際にオランダ陸



写真1 筑後町の龍踊



写真2 筑後町の傘鉾

軍の格好をして登場したが、このときの衣装はデルプラットというオランダ人が本国からもってきたミリタリー衣装であったという（大田 2013 : 97）。さらに、長崎くんちでは、各町内から傘鉾と呼ばれる作り物が出される（写真2）。傘鉾には、「垂れ」あるいは「さがり」という赤い布がつけられ、布には長崎刺繍が施されたものもある⁴⁾。この長崎刺繍は、長崎市中に居住していた唐人によって 17 世紀後半頃に伝えられた刺繍技術が、定着したものであるといわれている⁵⁾。

このように、長崎くんちでは、中国やオランダからの影響を受けた要素が見られるのである。しかも興味深いことに、本籠町の龍踊も長崎刺繍も、もとは唐人、すなわち中国人から直接伝えられたとされており、さらにいえば本籠町の龍踊にしる江戸町のオランダ陸軍にしる、衣装を（龍踊の場合は唐楽器も）中国やオランダ本国から取り寄せた、もしくはもってきたといわれている。これが歴史的事実であるのか、筆者は寡聞にして知らない。しかし、たとえこのような伝承が後になって創造されたものであったとしても、そのよう



図1 山王祭において出された風流
(早稲田大学図書館所蔵)

な伝承が生み出された心性を理解しようとするならば、そこにできる限り本物を見せたいという意図、あるいはよりリアルなものを提示したいという志向性を読み取ることができよう⁶⁾。このようなことが起こりうる理由の1つは、長崎という場所の歴史性にあるものと思われる。なぜならば、近世期の日本において、外国もしくは異民族との交流は、中国、オランダ、朝鮮、琉球、アイヌに限られていたが(仲尾 2007 : iii-iv)、このうち中国およびオランダとの交流は、長崎のみで行われていたからである⁷⁾。

3 唐人行列と唐子・唐人踊り

日本の祭礼に見る「異国」からの影響は、長崎くんちにのみ見られるわけでもない。1838年(天保9)に江戸で刊行された『東都歳事記』には、当時の江戸で行われていた山王祭の様子が描かれている(斎藤 1970 : 110-111)。そこには、朝鮮通信使の格好をし、象の作り物を伴った一団を見て取ることができる(図1)。朝鮮通信使とは、1607年(慶長12)から1811年(文化8)までの間に12回ほど、朝鮮から日本に派遣された使節団のことをいう。一行は、漢陽を出発して釜山まで陸路を行き、そこから船に乗り、対馬・壱岐を経て瀬戸内海に入り、いくつかの港に立ち寄りながら大坂へと至る。その後、京都を経

由して江戸まで行ったのである⁸⁾ (任 204 : 15)。山王祭は、神田祭とともに江戸を代表する祭礼の 1 つであったが、そこに登場した朝鮮通信使の一行はもちろん本物ではない。江戸の庶民が彼らの格好を模倣して、行列を組んで歩いたのである。朝鮮通信使は、当時の庶民にとって注目の的であり、一行が近くを通過するとなると多くの人々が見物に訪れたようである (仲尾 2007 : 177-178)。その様子について、例えば江戸時代の名古屋地方の武士によって著された日記、『鸚鵡籠中記』では、正徳元年 (1711 年) 10 月 4 日の条に、「四日 快晴。本町そのほか通り町の戸々、簾かけ屏風きらびやかにたて廻し、見物男女終日巷に充つ。御祭礼の如し」と記している (朝日 1995 : 200-201)。興味深いことに、『鸚鵡籠中記』によると、通信使一行の到着は翌 5 日であったようであるから (同 : 201-203)、「終日巷に充つ」とされた 4 日の見物人たちは何も見ずに終わったはずである。そうした彼らの行為からは、朝鮮通信使を何としてでも見たいという思いが伝わってくる⁹⁾。

また、1763 年 (宝暦 13) に日本にやってきた 11 回目の通信使についての日本側の記録、『朝鮮来聘 宝暦物語』にも¹⁰⁾、大坂から川をさかのぼって船で京都へと向かう通信使一行を見物しようと、川岸に集まった人々の姿について、次のような記述がある。

両方の川端には、近国、近在の老若男女その数幾千万といふ事を知らず。男子のかざす扇は、山に懸かりし白雲の如く、女の頂し綿帽子はふもとに敷し雪に似たり。居並ぶ躰を見渡せば、千躰仏の如く、更に明 (空) 地はなかりけり (谷川 (他・編) 1981 : 302)。

見物人が「幾千万」という記述は、さすがにおおげさであると思われるが、いずれにせよ、これらの記録から多くの人々が朝鮮通信使に強い関心を抱いていたことが理解できる。だからこそ、江戸の庶民も祭礼の中で彼らの格好をまねることで、この祭りを見にきた人々の注目を集め、喝采を浴びようとしたのである。このように、祭礼の際に庶民が朝鮮通信使のまねをして練り歩く行列のことを、一般に唐人行列と呼んでいたが¹¹⁾、唐人行列が見られたのは江戸の祭礼だけでなく、名古屋東照宮の祭礼 (現 : 愛知県名古屋市) や津八幡宮の祭礼 (現 : 三重県津市) でも見られたことが、当時の絵図からわかっている (特別展「徳川家康」及び「豊かなる朝鮮王朝の文化」「茶の湯の名品」企画運営委員会 2015、まつり・祭・津まつり展実行委員会 (編) 2004)。

さらに、現在でも、岡山県瀬戸内市牛窓町の疫神社の秋祭りや、三重県津市の津まつり、同じく三重県鈴鹿市にある須賀神社の牛頭天王春祭などには、唐子踊りもしくは唐人踊りと呼ばれる踊りが伝承されており、朝鮮通信使との関係が示唆されている (写真 3)。このうち、岡山県牛窓町は瀬戸内の良港であることから、通信使が日本にやってきた全 12 回のうち、8 回ほど寄港している (任 2004 : 24)。ここの疫神社で見られる唐子踊りは、6~7 歳の少年 2 人によって踊られる。この踊りの由来については諸説あるものの、仲尾宏



写真3 津まつりの唐人踊り

によると、朝鮮通信使としてやってきた小童の舞を取り入れたことはほぼ確かであろうとしている¹²⁾ (仲尾 2007 : 183)。小童とは、年少の少年たちで構成され、上官の侍従としての役を担うとともに、暇で退屈なときには一行を喜ばせるために余興を行い、主に対舞を踊ったという (任 2004 : 167-176)。そうした小童の舞も、近世の庶民たちの興味を引いたようである。1719年 (享保4) に、朝鮮通信使の一員として来日した申維翰によって著された『海游録』の中に、江戸へ向かう途中、兵庫に泊まった夜の出来事として、「夜、姜子青と湾岸の板を舗いたところに出て、楽手たちに鼓笛を奏でさせ、二人の童子を対舞させた。群倭が雲の如く集まった」と記している (申 1974 : 106、下線は引用者)。

こうした牛窓町の唐子踊り対して、唐人踊りが伝承されている三重県津市や同県鈴鹿市は、朝鮮通信使が通過した場所ではない。にもかかわらず、これらの土地でこの踊りが演じられることについて、両地域とも似たような伝承が存在する。すなわち、その土地出身の商人が江戸で見た唐人踊りに感銘を受け、郷里に伝えたのだという (任 2004 : 44, 57)。唐人踊りがどれほど当時の人々を惹きつけたのか、この伝承からもうかがい知ることができる。

4 まとめにかえて

以上、本稿では、日本の祭礼の中に「異国」からの影響をうかがわせる要素が見られることを、具体的に明らかにしてきた。祭礼は、四季を通じて日本のいたるところで見ることのできる文化現象である。このため、祭礼は日本人にとってきわめて身近な行事であり、そうした中に「異国」からの影響を思わせる要素が入り込んでいるのである。このようなことが起こり得た理由として、以下の2点を指摘することができる。第1に、祭りの担い手の側に見物人からの喝采を浴びたいという欲求が存在していたこと、第2に、この欲求を満たすためには、「異国」の要素を取り入れることが有効であるという認識を、担い手たちがもっていたことである。

但し、これらの要素の各祭礼への取り入れられ方については、長崎くんちにおける本籠町の龍踊・江戸町のオランダ陸軍・長崎刺繍の場合と、唐人行列あるいは唐子・唐人踊りの場合とでは、少々異なっている。前者については、すでに述べたように、長崎に居住する中国人から龍踊や刺繍を直接伝えられた、さらには衣装なども中国やオランダ本国から取り寄せた、もしくはもってきたという伝承がある。そこからは、できる限り本物を見せたい、よりリアルなものを提示したいという踊町の人々の思いを読み取ることができる。これに対して後者に関しては、とりわけ唐子・唐人踊りの場合、牛窓町のそれも含め朝鮮通信使から直接習ったという記録はもちろん、伝承さえ存在していない。それどころか津市や鈴鹿市の唐人踊りでは、伝承からすると、江戸で実演されていた通信使の踊りをその場で見て覚え、郷里の祭礼の中で再演したとされている。おそらく、このような伝承と密接に関わるのであろうが、両地域の踊りは通信使のいかなる踊りを模倣したものなのか判然としない。

この点に関して、特に津市の唐人踊りについて、近年では次のような指摘もなされている。津まつりについては、江戸時代初期から後期にかけて5種類の絵巻が残されているが、それらを見てみると、唐人踊りが現在のように朝鮮通信使を模したような姿になるのは江戸時代後半のことであり、それ以前は南蛮風の衣装を着けた人々の行列が描かれている(三重県 2012 : 534-535、まつり・祭・津まつり展実行委員会(編) 2004 : 28-39)。この南蛮風行列を描いた絵巻は、ニューヨーク・パブリックライブラリー所蔵の『勢州一志郡八幡宮祭礼』上・下であり(以下ニューヨーク本と略称する)、福原敏男によるとニューヨーク本の成立は17C後半(延宝末～貞享初めごろ、すなわち1670年代末～1680年代半ばごろ)であるという(福原 2004 : 110)。ニューヨーク本と他本との制作年代には100年以上の隔たりがあるため(同 : 108)、この絵巻は近世初期～中期にかけての津八幡宮祭礼を描いた唯一の図像資料となる。では、ここに描かれている祭礼は、どれほど忠実に当時の様子を再現しているのであろうか。福原は、以下に述べる2つの理由から、ニューヨーク本はかなり正確に津八幡宮祭礼の様子を描いているとしている(同 : 106-108)。その理由とは、第1に、1656年(明暦2)に成立した地誌『勢陽雜記』における同祭礼についての記述とほぼ一致すること、第2に、祭礼行列の背景に描かれた街道の屈曲と脇道の表現が、東京国立博物館所蔵の鳥瞰図『伊勢路見取絵図』(伊勢街道分間延絵図)と一致しており、非常に正確な町並みが表現されていること¹³⁾、である。だとするならば、ニューヨーク本に見られる南蛮風行列は、当時の津八幡宮祭礼に実際に出されていたことになる。しかし、福原によると、この絵巻を見る限り、行列は南蛮人を完璧に模倣したものではなく、中国的な要素や想像上の動物である猩々を思わせる要素が混ざりこんでおり、その意味でニューヨーク本の唐人は「異人としての唐人」として描かれているという¹⁴⁾(同 : 113-114)。しかも、そうした傾向は、唐人行列が朝鮮通信使の仮装をするようになってからも見て取れ、その行列は南蛮風や中国風が混入した折衷的なものになっていたと彼は指摘している。

ここまで長々と、津八幡宮祭礼における唐人踊りの歴史とその特徴について説明してきたが、確かにこのように考えてくると、現在の踊りの原型が判然としない理由も明らかとなる。なぜならば、彼らが模倣したはずの原型など始めから存在しておらず、あの踊りは彼らの「異国」イメージをもとに創造されたものであったからである。

考えてみれば、そうした点は、すでに紹介した山王祭における出し物にも共通する。『東都歳時記』には、朝鮮通信使と象の作り物が描かれていたが、これらに関して同書では「麴町より朝鮮人來朝のねりものにて、大なる象の造りもの出しける事世に名高し」と記している（斎藤 1970 : 113）。ここからわかるように、2つの出し物は、ともに麴町から出されていたのである。もちろん、現実の朝鮮通信使が象を連れてきたことはない。両者は、本来、別々の出来事であった。通信使については、すでに述べたのでひとまずおくとして、象に関しては説明が必要であろう。橋本和典によると、明治以前、象は日本に8回きているという（橋本 2002）。このうち、6回目にやってきた象は1728年（享保13）に長崎に上陸し、陸路、江戸まで旅をしている（和田 2015）。途中、京都で時の天皇、中御門天皇が見物をし、また江戸では将軍吉宗が見物している。象は陸路を行ったこともあり、その様子は各地の記録に残されている。それだけ耳目を集めたのである。それは江戸でも同様であり、和田実によると、江戸の人々は象の到着を待ちわびていたようであったと述べている（同 : 99）。山王祭における麴町の象の初見は、『続・江戸型山車のゆくえ』によると1731年（享保16）であるというから（千代田区教育委員会 1999 : 91）、象に対する興奮が冷めやらぬうちに出されたといつてよい¹⁵⁾。

だが、繰り返しになるが、麴町はそれほど評判を呼んだ象を単独で出すことはせず、まったく別の出来事であった朝鮮通信使の仮装とともに出していた¹⁶⁾。このことは、きわめて重要であると思われる。彼らは、本来コンテクストを異にする2つのものを同時に配することによって、何を見せようとしていたのであろうか。おそらく、それはリアルな異国の姿ではなく想像上の「異国」イメージであり、そうすることによって見ている者たちに強烈なインパクトを残そうとしたものと思われる。朝鮮通信使と象という奇妙な取り合わせは、このような志向性の下で生まれたのではないかと考える。

このように、祭礼は、リアルさの追及のみならず、多少の創造、もっといってしまえば捏造をも含みつつ、「異国」の要素を取り込むことで華やかさを増していった。今日、祭礼というと「伝統」的で「日本的なるもの」を連想しがちであるが、そうした祭礼に対する認識は、ひょっとすると近世期の人々が抱いていたそれと大きく異なるのではないだろうか。そんなことを考えさせられる事例であるといえる。

[注]

- 1) この部分は、長崎伝統芸能振興会の web サイトを参照した。URL は以下の通りである。
<http://nagasaki-kunchi.com/dashimono/> (2016 年 9 月 20 日閲覧)
- 2) この部分は、長崎市の web サイトを参照した。URL は以下の通りである。
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/190001/192001/p000759.html> (2016 年 9 月 20 日閲覧)
ちなみに、山口麻太郎は、龍踊の開始を享保年間としている (山口 1972 : 191)。
- 3) 龍踊の由来に関して、王維は、現在見られる 4 つの龍踊のうち、筑後町のその奉納は 1973 年 (昭和 48) からであるが、以前町内に唐寺である福濟寺があったため、この町の龍踊も唐人たちによって伝えられたといわれていると報告している (王維 2000 : 94)。
- 4) ちなみに、写真 2 の傘鉾にも刺繍が施されているが、これが長崎刺繍であるかは未確認である。
- 5) この部分は、長崎県の web サイトを参照した。URL は以下の通りである。
<http://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/index.php/view/51> (2016 年 9 月 20 日閲覧)
- 6) もちろん、だからといって、こうした要素が現在でも本場のそれと寸分たがわぬものとして、披露されているわけではない。王維によると、龍踊は日本人によって長い間伝承されてきたため、日本の芸能文化と融合し受容され、変容した部分が見られるとしている (王維 2000 : 100)。
また、ここで指摘した、できる限り本物を見せたいという意図やよりリアルなものを提示したいという志向性が、長崎くんち全体を貫く特徴であるかどうかは、なお議論の余地がある。本稿での主張は、あくまで本籠町の龍踊・江戸町のオランダ陸軍・長崎刺繍という 3 つの事例のみにもとづいてなされたものに過ぎない。
- 7) とはいえ、このような指摘は、本章で取り上げた 3 つの事例における本物志向が何に由来するのかわ、十分に説明しているわけではない。この点については、稿を改めて考えたい。
- 8) なお、1636 年 (寛永 13)、1643 年 (寛永 20)、1655 年 (明暦元) の通信使は、江戸からさらに北上して、日光まで行っている (任 2004 : 15-16)。
- 9) 仲尾宏によると、1763 年 (宝暦 13) にやってきた通信使を一目見ようと、掛川宿 (現：静岡県掛川市) まで出かけた近在の人々が、いつまでたってもやっこない通信使にしびれを切らして詠んだ戯れ歌があるとしている (仲尾 2007 : 114-115)。それは、『静岡県史』資料編 13 所載の「宝暦十三年正月 朝鮮使節通行風聞記」の中にある、以下の 3 首の歌である。
来る来ると扱も延たり縮んだり ちやうちん人のあかさくらさを
唐人ハよどの川瀬の水車 きやうもくるくるあすもくるくる
唐人が来るとわいへと馬ばかり きりがなけれハ下タのめいわく (静岡県 1990 : 345)
このときの通信使の旅程は、約 1 週間遅れたらしい。それでも見ようとした人々の熱意を、ここからも理解することができる。但し、朝鮮通信使が通過する街道沿いの庶民たちにとって、一行の通過は楽しみばかりではなかったようである。彼らの通過に支障のないよう、さまざまな労役が近在の村々に課せられていたからである (仲尾 2007 : 138-144)。
- 10) 『朝鮮来聘 宝暦物語』の作者は不明である。なお、この文書は、谷川健一 (他・編) 1981『日本庶民生活史料集成 27 三国交流誌』三一書房 pp.281-319 に収録されている。
- 11) 日本において「唐」という字は、一般に中国を意味する。しかし、唐人行列に関する江戸時代の絵図や、現在も伝承されている唐子踊り・唐人踊り (この踊りについては、本文中で後述する) を見る限り、これらの出し物は朝鮮通信使の影響も受けていたと思われる。ちなみに、任東権は、日本語で「唐」も「韓」も同じく「カラ」と発音することから、2 つの文字は混同されやすいと指摘している (任 2004 : 176-177)。また、これに関連して、福原敏男によると「唐人」という言葉は、もともと文字通り中国人を指していたが、大航海時代における西洋人との接触を経た直後、この言葉は外国人一般の意味に転化したとしている (福原 2004 : 110)。要するに、16C 以降、「唐人」という言葉は「外国人」を意味するようになり、そのため当然、この言葉には南蛮人さえも含まれるようになったのである。
- 12) 任東権も、似たような指摘をしている (任 2004 : 31-32)。また、申維翰によって著された『海游録』の東洋文庫版 (1974 年出版) の訳注者である姜在彦も、同書の訳注において、「牛窓町紺浦の疫神社では、毎年十月二十四日の祭礼に『唐子踊り』を奉納するが、これは本書にたびたび出てくる二人の童子 (小童) の対舞をまねたものであることはいままでもない」と述べている (申 1974 : 102、() は引用者)。
- 13) 背景が写実的であるため、そこに描かれている行列も現実を忠実に写し取った可能性が高い、ということであろう。なお、ここでの街道に関する所見は三重大学の菅原洋一によると、福原は述べている (福原 2004 : 108)。
- 14) 福原が用いる「唐人」という言葉の意味については、注 11 を参照されたい。
- 15) ちなみに、福原によると、麴町の象は木綿製であったという (福原 2012 : 129)。

16) もちろん、ここでは、逆の指摘も可能である。すなわち、「あれほど人々の注目を浴びた朝鮮通信使を単独で出すことはせず、象の作り物とともに出していた」と。

[参考文献]

- 朝日重章 1995『鸚鵡籠中記』（下）岩波書店
- 王 維 2000「日本華僑における龍踊の伝承と形態」『名古屋造形大学 名古屋造形芸術短期大学紀要』
6 pp.89-102
- 大田由紀 2013『長崎くんち考』長崎文献社
- 斎藤月岑 1970『東都歳時記』2 朝倉晴彦（校注）平凡社東洋文庫
- 静岡県 1990『静岡県史』資料編 13 近世 5
- 申 維翰 1974『海游録』姜在彦（訳注）平凡社東洋文庫
- 谷川健一（他・編）1981『日本庶民生活史料集成 27 三国交流誌』三一書房
- 千代田区教育委員会 1999『続・江戸型山車のゆくえ』
- 特別展「徳川家康」及び「豊かなる朝鮮王朝の文化」「茶の湯の名品」企画運営委員会 2015『日韓国交
正常化 50 周年記念 豊かなる朝鮮王朝の文化』
- 仲尾 宏 2007『朝鮮通信使』岩波新書
- 任 東權 2004『朝鮮通信使と文化伝播』武田且（訳）第一書房
- 橋本和典 2002「明治期以前における舶載象の渡来史考補遺」『獣医畜産新報』55-9 pp.776-780
- 福原敏男 2004「祭礼の唐人」まつり・祭・津まつり展実行委員会（編）『まつり・祭・津まつり』pp.106-114
———. 2012『江戸最盛期の神田祭絵巻』渡辺出版
- まつり・祭・津まつり展実行委員会（編）2004『まつり・祭・津まつり』
- 三重県 2012『三重県史』別編 民俗
- 柳田國男 1990「日本の祭」『柳田國男全集』13 ちくま文庫 pp.213-430
- 山口麻太郎 1971『日本の民俗 山口』第一法規
- 和田 実 2015『享保 14 年、象、江戸へゆく』岩田書院

所属：山口大学人文学部

E-mail アドレス：yabe@yamaguchi-u.ac.jp